

子ども記者が記事を書くまで

事前・事後研修

「巨大災害」を想像してみよう



愛知工業大学名電高校のプロジェクト・メンバーから取材のアドバイスをもらった

「南海トラフ地震」が発生した場合、奥村先生は「避難所生活の苦しさ、復興の道のりなどを詳しく教えてもらった。「地震が発生した時はとにかく死な

ないこと、地震や津波から逃げること」、数日から数カ月は「被災した社会を生き抜く」という意識や覚悟を持ち、「助けられる」ではなく、「人を助け、喜ばせる」という気持ち・行動が復興への原動力となることを学んだ。



事前研修のワークショップの様子

東海地方に大きな災害をもたらすとされている「南海トラフ地震」が、約1ヶ月の避難所生活、約47万人に及ぶ被災者、約10倍の被害を及ぼす

の約500万人と想定されている「救助活動や避難生活の支援をしてくれる自衛隊の人数は東日本大震災と同じくらいの約11万人。一人当たりが受けられる支援も10分の1程度と想像していた方がよい。そのため、日頃から地震が起きた場合のことを考えて、心も物もしつかり準備しておくことが必要」と話した。

また、昨年熊本取材に行き「熊本のいま“新聞”を発行した愛知工業大学名電高校・中高一貫コースの「熊本応援プロジェクト」メンバーの尾崎陸斗さん、大石光輝さん、大石康喜さんから、取材の心構えを聞いた。「地震にあった人の気持ちや想像しながら話を聞くこと」の重要性を学んだ。

ワークショップ(編集会議)で考えをまとめた



各自がカードに取材の内容や考えたことを書き、それをグループで話し合い、記事にまとめた

取材後のワークショップ(編集会議)や事後研修では、取材別にグループを作って記事作りを進めた。取材先で聞いたことをいっ、誰が言ったことなのか、自分はどう思ったのかをみんなで整理して、記事を書いた。その進め方を紹介する。

まず、取材内容を文章にして、1つのカードに1つの事柄を書く。その場合、「事実」と「感想」に分けて書き、各自がカードを一枚ずつ読み上げて、同じカードを書いた人はその場で紙に張り付けていく。カードが出揃ったタイミングで、似た内容のカードを集めてグループにタイトルをつける。この作業を行っていくと、人の意見も聞くことでどんなことが重要だったか、何を取り上げるべきなのかというのを整理できた。その後一人ひとりが記事を書いた。

みんなもいっしょに考えよう!

東海地域で生まれ育った子ども記者たち。南海トラフ巨大地震や東日本大震災については何度か耳にしたことがあっただろう。しかし、今回、子ども記者が取材したのは津波を伴わない直下型地震「熊本地震」の被災地であった。

南海トラフ沿いの地震が発生する前40年、後10年程度は直下型地震の活動が活発になることが知られている。今、私たちは活動期の真只中を生活している。1944年東南海地震、1946年南海地震の前後にも死者が千人を超える直下型地震が多発した。1927年北丹後地震、1943年鳥取地震、1945年三河地震、1948年福井地震。東海地域で発生した三河地震では2,306人が犠牲になった。次の南海トラフ沿いの地震だけでなく、直下型地震にも警戒しなければならないことは過去が物語っている。

子ども記者たちは、28時間差で二度の大きな

揺れに襲われ、翻弄された人びとの様子が印象に残ったようだ。

益城町では98%の建物に何かしらの被害が発生し、前震で8人、本震で12人が犠牲になった。しかし、前震のあと多くの住民は避難所や車で寝泊まりしていた。もしも突然本震が発生していたらもっと多くの犠牲が出ていただろう。また、子ども記者の記事でも取り上げられている「安心のあとの一撃はダメージ倍増」という奥本医師の言葉にあるように、その後、屋根のあるところで安心して眠れないという話もたくさん聞いた。自動車の中で眠ることさえ不安に感じ、畑の上で眠ったという話まであった。このことは、多くの住民が避難生活を余儀なくされ厳しい避難生活を強いられたことにもつながる。熊本地震の震災関連死は2017年8月3日時点で189人に達した。地震に備えることの難しさを痛感したことだろう。

さらに、子ども記者たちは被災しながらも他の



奥村 与志弘氏

1980年生まれ。2008年京都大学大学院修了、博士(情報学)取得。人と防災未来センター(神戸市)を経て、12年に京都大学大学院助教、17年4月より現職。東日本大震災では政府現地対策本部に入ったほか、愛知県田原市の防災会議委員も務める。

被災者のために活躍した人びとに感銘を受けたようだ。益城町立飯野小学校の児童たちは、地域の人たちを勇気づけようと、被災された方々にマッサージをしたり、演奏会を開いたり、一緒に運動会を楽しんだりした。子ども記者たちは、同じ年頃の彼らが地震をどのように感じ、さまざまな支援をどのように受け止め、被災された人びとに何をしたのか、特に関心をもって話を聞いていたように見えた。

熊本地震の被災地への取材を通じて、南海トラフ沿いの地震前後の直下型地震に対する関心が高まったのではないかと。過去の経験や他の地域の経験を生かさなければならない。